様式 C-7-2

自己評価報告書

平成　２３　年　４月　１８日現在

機関番号：１２６０３
研究種目：基盤（Ｃ）一般
研究期間：2008～2012
課題番号：２０５１０２２６
研究課題名（和文）　ベトナム国内での聞き取り調査によるベトナム戦争の記憶に関する研究

研究課題名（英文）　Study on Memories of Vietnam War in Vietnam

研究代表者　今井　昭夫（IMAI AKIO）
東京外国語大学・大学院総合国際学研究院・教授
研究者番号：２０２０３２８４

研究分野：複合新領域
科研費の分科・細目：地域研究
キーワード：東南アジア

１．研究計画の概要

本研究の目的は、ベトナム国内においてベトナム人がベトナム戦争をどのように記憶しているのかの聞き取り調査を通して、①「低い位置の視線」からベトナム戦争を歴史的に再検討し、②ベトナム戦争後の兵士の復員状況や「戦後処理」を明らかにし、③ベトナムでの「戦争の記憶」のあり方がどのようなものであり、戦後ベトナムにおいて如何なる政治史的・精神史的意味をもってきたかを辿ろうとするものである。これによってベトナム現代史におけるベトナム戦争の影響の様相を具体的に提示し、現代ベトナム地域研究に寄与しようとするものである。また、他の国々の戦争の記憶のあり方と比較することによって、「戦争の記憶」研究一般にも学術的に貢献することを目指している。

年度ごとの聞き取り調査テーマとしては、（１）平成 20 年度：戦争と宗教、（２）平成 21 年度：少数民族の戦争参加、（３）平成 22 年度：北爆の記憶、疎開の記憶、（４）平成 23 年度：虐殺の記憶、（５）平成 24 年度：知識人の戦争の記憶、戦争の語り（従軍作家と学徒兵）を予定している。

２．研究の進捗状況

過去３年間におけて、１年に最低でも２回（１回は２週間程度まで）はベトナム国内での聞き取り調査を定期的に実施している。この点は計画通りである。平成２０年度は、フエ市（７月 29 日～８月８日）、クアンガイ省（12 月 19 日～12 月 31 日）。平成２１年度は、タイグエン省（12 月 23 日～12 月 31 日）、クアンビン省（３月３日～３月 10 日）。平成２２年度は、ハノイ市（12 月 24 日～12 月 31 日）、クアンチ省（２月 28 日～３月 10 日）。ただし、現地調査は頻度は予定通りであるが、ベトナム側の都合もあり、当初の年度ごとのテーマにそった現地聞き取り調査を実施することが必ずしもできなった。今後の調査地としては、これまでの現地調査で手薄だった中部高原とメコンデルタを予定している。

現地聞き取り調査の結果は、３年間で４本の論文にまとめることができた。従来の研究ではあまり触れられてこなかった点で、これまでの私の調査結果から浮かび上がってきた問題点として以下の点が挙げられる。①ベトナム戦争中の暫定軍事境界線を越えたヒトとモノの動き、とりわけ南部から北部への動きが以外と活発で、「分断国家」に囚われすぎることの危険性。②南部での解放勢力の戦闘主体は何か。南ベトナム解放民族戦線ではなく、南ベトナム解放軍ではなかったか。③主力軍、地方軍、民兵（ゲリラ）、青年突撃隊、民間人幹部など南部戦場における解放勢力側の戦士の多様な姿。④人民の貢献・献身・犠牲によって遂行された「人民戦争」性。⑤戦後の待遇の差異。⑥公式的語りの裏にある非公式的語りの「戦争の記憶」の存在。これらの点を残り２年間の研究でさらに研究を深めていきたい。また、現地調査と論文刊行まで２年ほどのズレがあるが、できればこれをもう少し縮めたい。また個々の現地調査を俯瞰するような見取り図的な論文の執筆を本科研満了時までに目指したい。

３．現在までの達成度

②おおむね順調に進展している

現地聞き取り調査は、上で述べたような問題

点はあるものの、ほぼ計画通りの頻度と規模で実施できている。調査結果を論文にまとめることも比較的順調である。あと望むべき点は、当初の計画通りの年度テーマにそった聞き取り調査が実施できることである。調査結果のまとめについては、学問的成熟度についてはまだまだ不満も残るが、「低い位置」の視点からベトナムのさまざまな人々の戦争体験の声を掬い上げるという点については成果を挙げており、これまでになかった研究であると評価することができるのではなかろうか。以上の点から下記のような評価を下すこととなった。

②おおむね順調に進展している

４．今後の研究の推進方策

当初計画していた年度テーマと実際の現地調査が若干ずれてしまったので、以下のように調整をはかりたい。（１）戦争と宗教のテーマについては、平成 23 年度に聞き取り調査を試みたい。（２）少数民族の戦争参加については、ベトナム西北地方のムオン族とターイ族には調査を実施したが、さらに中部高原においても実施する。（３）学徒兵については、ハノイ人文社会科学大学の協力を得て、平成 24 年度に実施する方向で調整に入る。

また、方法論や理論の研究が弱かった点を反省し、「戦争の記憶」に関する研究論文や研究書にあたる努力を強化する。また東アジア近代史学会のインドシナ戦争史研究会に積極的に参加し、会員との意見交換を進め、知見の拡充をはかる。

５．　代表的な研究成果

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計４件）

①今井昭夫「ベトナム中部クアンガイ省におけるベトナム戦争の記憶」『東京外大　東南アジア学』第 16 巻、2011 年。57～73 頁。査読無し。

②今井昭夫「旧南ベトナム・軍事境界線地域のベトナム戦争―チティエン軍区・解放勢力側戦士への聞き取り調査―」『東京外国語大学論集』第 81 号、2010 年。417～433 頁。査読無し。

③今井昭夫「ベトナム南部ベンチェー省でのベトナム戦争―元ベンチェー省隊・参謀長ファン・ディン氏へのインタビュー―」『東京外大　東南アジア学』第 15 巻、2010 年。69～81 頁。査読無し。

④今井昭夫「旧北ベトナム・西北地方在住少数民族のベトナム戦争参加―ムオン族とターイ族への聞き取り調査から―」『東京外国語大学論集』第 79 号、2009 年。１～20 頁。査読無し。

〔図書〕（計１件）

①今井昭夫・岩崎稔編『記憶の地層を掘るアジアの植民地支配と戦争の語り方』御茶の水書房、2010 年。総ページ数 266．今井論文は、35～68 頁および 259～266 頁。